

## 私の筑波大学よこある記

奥村 輝

理工学研究科修士

### <はじめに>

新聞記者2年目の私は、いまでも取材先に、決まってこう驚かれる。

「えっ、物理やったの!」

理工学研究科で理論物理のまねごとをし、修士の学位をいただいた。そこまで説明すると、次の質問がくる。

「また、どうして?」

物理学者になれなかった私には、つまるところ才能がなかったのだろう。しかし、入学を志したところから、筑波大学の持つ学際的な仕組みや大学で出会った人が、文理の垣根を横に歩いた私の進路選択を多に支えてくれた。学問の領域にとらわれない精神の恩恵にあずかったと思う。その経験をご紹介します。母校の皆さんの何かのお役に立つことがあれば、望外の喜びである。

### <単一キャンパスの総合大学>

研究者になろうと進学先を探していた、工業高専5年生の時。同じ「基礎工学」を冠するコースを大阪大学と筑波大学に見つけた。私の決め手は、「(ほぼ)単一キャンパスの総合大学」だった。工業高専は、工学単科の短大のような所。当時から、そこで形成されてきた自分のキャラクターには、危機感を覚えていた。「自分の変な人なのではないだろうか?」。さっそく編入学直後に、その洗礼を受けることになった。

サークルで一緒になった文科系学類の女性が忙しいとこぼす。「勉強できなくなったら本末転倒じゃない?」と私が言うと、こんな言葉が返ってきた。「それは、勉強する人の考え方です」

驚いてしまった。大学には勉強しにくるのではないのだろうか。

「勉強だけじゃない」。彼女は続けた。

サークルでいろんなことを体験してもいいだろうし、旅行で見聞を広めるのも学生時代ならではの大切なことと言われたと思う。その是非はともかく、そういう価値観に出会えたことが衝撃で、それだけでも貴重な体験だった。世の中にはいろんな人がいた。その後も学類生に、高校物理の始めに出てくる「慣性の法則」を説明しなければいけないこともあったし、逆に文科系の教授に「レトリックってなんですか?」と質問したこともある。異文化との遭遇は、お互い様なのであろう。

こうした出会いは在学中にたびたびと繰り返され、入学前に持っていた危機感が、明らかに事実だったことが分かってきた。しかし、悪い気はしなかった。自分に新しい世界の光が射しこんでくることにほかならなかったからだ。

### <総合科目・自由科目>

総合科目は体育専門学群「メディアに見るスポーツ」、自由科目には日本語・日本文化学類の「現代日本語4」を選んだ。実に楽しかった。私にはすでにジャーナリズムへの志向が現れていたが、筑波大学はそれにも応えてくれた。

「現代日本語4」では、「新聞記事文における反復表現」をテーマに、新聞記事

を構造的に検討した。文章中に登場する語句を拾い、重要な語句が記事の伝えるニュースに対応して冒頭で繰り返されるのを確認した。記事の逆三角型構造だ。

週1回の講義であったが、1年間を通じて、先行研究を学び、自分で手法を考えて6ページのレポートを作った。言語学への小さな入門だったが、門外漢の私に学問の作法から手とり足とり教わることができた。

「メディアに見るスポーツ」では、テレビでのマラソン中継を見た講義が最も印象に残っている。

40キロに近い地点を女子選手が上体を左に傾けて走っている。いや、傾け過ぎだろう。そのまま左に倒れ込むように走り、画面から消えた。実況が「道を間違えているようです」と叫ぶ。

ほんの数秒後、かき消すような歓声が上がり、今度は右に傾いた状態で選手がコースに戻って来た。解説者が言った。「沿道の応援は選手の力になります。一番苦しいところ、皆さん応援してあげてください」

ここでビデオは止められた。教室の教官は言う。「大間違いです。このふらつきは明らかに走れる状態ではない。解説者こそ止めさせるべきだ」

この選手は、コーチに体を支えられて

リタイヤした。「浴道の声に押されてやめることができなかった」とコメントしたという。私自身の感想文は「無知と偏向による合唱は怖い。合唱が始まったら一度疑ってみるべきだろう」とつぶられていた。記者になった今、読み返して身が引き締まる話だ。

大学というのは素晴らしい知的資産の宝庫だ。門外漢にも開かれている制度をありがたく思い返している。

### <研究学園都市>

編入学試験の面接で「周辺に研究所があるから」と、筑波大学への志望理由を述べたことを思い出す。つくばについて「街の中に大学しかない」とは誤りだ。確かに学問しかない街かも知れないが、その研究所街は、日本や世界の学界につながっていた。

私が転がりこんだのは、大総にあった高エネルギー物理学研究機構。大学院の1年目、私はここで科学論にも首を突っ込んでいた。迎えてくれた教授は、総合研究大学院大学の教授でもあり、すぐに日本中の大学の研究者のなかで勉強することができるようになった。形にならなかったのは残念だが、バイクで15分の場所にある日本最先端だった。むろん研究所自体が、世界をリードする物理学の研

究機関であることは言うまでもない。つくばとは、そういうすごい街だ。

シンポジウムや講演も随分多かった。毎週なにかしらの会場を回っては、常陽新聞に記事を書くアルバイトができたくらいだ。これは「つくばeメール通信」という連載になった。初回は「つくばに放った7人の“科学忍者たち”」とかいう表現で始まっている。確かにつくばは理科の街だった。

それを埋めに神田の古書店街にはよく出かけた。感じたのは通えないわけではないが、「つくばは東京の郊外というにはいささか遠すぎる」。宿舍の安さとはともありがたかったのだが、山手線までの片道72分は負担だった。それが常磐新線で30分になるという。つくばはどのように変わるのだろうか。

### <指導教官・住斉教授>

私は、物質工学系の住斉教授に足を向けて寝られない。学群時代からの指導教官である。

これまで紹介したように、私は“一心不乱に研究をする”院生では、全くなかった。そんな私をどう思われていたかを尋ねたことはないが、途中から「新聞記者になりたい」と言い出したはねっかえりを、よく辛抱強く指導していただ

たと思う。物理の研究室にいる記者希望者は珍しいが、それを自由にさせてくれる指導教官はもっと珍しい。

理科の研究室は、全体でのプロジェクトを院生各々に割り振ることが多く、一人の仕事の遅れが全体に響く。研究室の経営者でもある教授は、わがままを言う院生は抱えていてもしょうがなく、せいぜい放っておくのが普通だ。ところが「君はなにがやりたいのだね」と聞いてくれた。思えば、これが私の横紙破りの最大の支えだった。

大学とはなんだろう。先に「勉強するところではなかったのかと思わされた」と書いた。一方で、必ず卒業などがやって来ることに注目すれば、「どこかへ出ていかなければならない場所」とも言えるだろう。そして、その“どこかへ出ていくために”勉強する人もいれば、サークルに精を出してもいい。世界を旅行する選択もあるのだ。そういう時間の中で方向転換することは、周囲を見ても、もはや珍しくなかった。

事前の考えが足りなかったのだろう、私は大学院という場所で大きく舵を切ることとなった。その時に、担当教授という最も深く関係した人に、自分を認めてもらえたことに大変感謝している。そういう人に出会っていたことはとても幸せ

だった。

### <時代を先取り>

めでたく希望する職を得ることができたが、それからが大変だった。物理をやっていた記者は珍しがられても、ほとんど何の役にも立たない。

新人が最初に送り込まれるのは警察・司法取材だ。研究室からやって来た新米には、刑法や刑事訴訟法の知識はなく、それ以上に人付き合いを知らなかった。社内向けの新人記者紹介には、「かかって来た電話をとるのが驚きだった」と書いてしまったほどだ。

ところが、役に立たないはずの物理が役に立つ機会にでくわし始めている。私の働く岐阜県でも、小柴昌俊・東京大学名誉教授のノーベル賞受賞は神岡町のスーパーカミオカンデが舞台になった。その後も岐阜市民病院（岐阜市）での脳死移植、核融合科学研究所（土岐市）の電源装置火災などが続いた。

科学が生活の身近にある今、科学がニュースになるのは当然だ。社会に与える影響が大きくなっており、報道はむしろ遅れている。文理を横に歩いてきた私には、時代を先取りできた部分もある。私が勝手にそう思っているだけなのだが。

### <常に“新構想”を>

「新構想」。筑波大学のホームページには今でもそう謳われている。

そんな筑波大学も今年で創立30年だ。新構想による教育もだいぶ世の中に定着してきたと言えるだろう。文部科学省の「21世紀 COE プログラム」(トップ30)にも3件が採択され、研究でも成果を上げている。

一方で30年が経過し世間が追いついて来た部分もあるだろう。法人化に備えて、大学が変革を求められている時でもある。

江崎玲於奈・前学長は「道を離れ森に入れ」という言葉を紹介し続けた。常識的な場所には、当たり前の成果しかないという意味だ。私は社会の森の中の学問の道を離れ、突っ切って向こう側の道にできたようなものだった。“学際”の精神を持つ新構想大学があればこそだった。感謝するとともに、筑波大学にはいつまでも社会の変化に対応し続ける“常”新構想大学であり続けて欲しいと思う。

(おくむらてる 新聞記者)

